

2014 年度 第 2 回 断層問題に関する理工学合同委員会・幹事会 議事録

日時：平成 26 年 7 月 10 日（木） 10:00～12:10

場所：JGS 会館 3 階 会長室

出席：國生剛治，大塚康範，堀宗朗，末岡徹，谷和夫

（欠席者：なし）

配布資料：

資料 2-1：2014 年度第 1 回断層問題に関する理工学合同委員会・幹事会 議事録（案）

資料 2-2：断層問題に関する理工学合同委員会 規則（案）

資料 2-3：委員の委嘱，事務処理，予算に関するメモ

資料 2-4：解説本のタイトル，構成・目次，執筆者の候補等

資料 2-5：名簿（委員会メンバー，執筆者の候補）

議事：

1．前回（第 1 回，2014/4/28）議事録の確認

資料 2-1 に基づいて説明があり，以下の修正をして承認した。

- ・ 3（2）の最初の 2 項目（理学・工学の協調に相応しくない表現）を削除した。
- ・ 3（3）の 1 行目の「地盤工学会」（誤記）を「土木学会」に修正した。

2．規則の確認

資料 2-2 に基づいて，委員会の名称や目的等が修正されたことが説明された。特に意見はなかった。

3．委員の委嘱，事務処理，予算に関する確認

資料 2-3 に基づいて，事務手続きの状況について説明された。以下を確認した。

- ・ 3 名の代表は各学会長から，他のメンバーは國生委員長から委嘱される。
- ・ 地盤工学会と日本地震工学会では，拠出金について理事会の了承が得られた。
- ・ 日本応用地質学会では，通常は会員の手弁当（所属の会社負担）で活動しているので，拠出金について検討中である。
- ・ 予算は主に旅費に支出される。
- ・ 事務処理は地盤工学会（担当は****氏）が行う。入金は銀行振込みとする。

4．解説本に関する検討

資料 2-4&5 に基づいて，タイトル，構成・目次，執筆者に関する各メンバーからの提案をとりまとめた内容が説明された。以下の議論があった。

（1）全体のイメージ

- ・ 読者層（ターゲット）として広く一般人をイメージする。断層に興味を持つ教養人やマスコミ記者・解説員等も含まれる。
 - 横書きの専門書ではなく，縦書きのブルーバックス（講談社）や新書を目指す。
 - 数式は本文中に含めない。ただし，図中に含むことは可とする。
- ・ 全体の分量は約 200 ページとする。
- ・ 販売目標は数万部（3～5 万部）とする。
- ・ 著者の総数は約 20 名とする。各章は原則として 1 名で担当する。
- ・ 報酬（原稿料）を支給する。
- ・ 全体を貫く統一した思想ないしストーリーを持てるか？

- 3学会の統一見解あるいは各学会の個別見解を示すことができるか？
 - 理学では、学会の意見・見解をまとめることはできない。個人の見解しかない。
 - 断層問題に係る意見が多様であることを提示，両論併記ないし意見の幅（スペクトル）を示すことが重要である。
 - 過去に長周期地震動についても，理学研究者の考え方は多様であった。具体的に長周期地震動の波形を各研究者が作成すると，大小さまざまである。波形の幅を見ながらどの波形を一つないし複数選択するかは，技術者の裁量である。この選択は，技術者には拠らず，一定の範囲には落ち着く。両極端の少数意見は声が大きく違いが際立つが，実質的・実務的には，このような少数意見は排除される。
 - 執筆者に書きっぱなしにはさせない。活断層に関するいくつかの論点に関して，各執筆者の具体的な見解を提示してもらう。
 - 執筆者の元原稿のままでは統一感に欠けるので，幹事団が筆を入れる（推敲する）ことを前提とする。
 - 問題解決の目的意識があるのは工学なので，工学が全体をまとめる。
 - シリーズ化の可能性があるか？
 - シニアの技術者・研究者から若手に向けて，過去にどのような研究・技術開発がなされたかを伝承する。
 - 断層問題は，それ以外の土木工学・地盤工学・資源工学等の分野の諸問題に展開するシリーズ化のきっかけになる。
 - 提言については，執筆・編集の過程から，触媒的な内容の議論が出てくるか？
- (2) タイトル
- 特に意見はなかった。
- (3) 構成・目次
- 理学（地質学）における断層の解釈については意見が割れるので，対話形式が適切である。
 - 賛否両論を個別に取材し，取材者または責任者が取材した内容を論じる。
 - どこまで断層のこと（いつ・どのくらい動くのか等）が分かるのか，予め用意した質問に対する各人の見解を聞き出す。
 - 面接取材者（interviewer）には適切な専門家（scientific technical writer）を充てる。
 - 主断層・副断層・分岐断層に関して海外での評価はどうか？
 - 国内の意見だけで十分か？
 - 断層変位による被害について，断層と地すべりの関係も含める。
 - 1章の表題として，「断層って何？」は柔らかい表現で良い。
- (4) 執筆者
- ****氏は，まとめ役に適任である。
 - ****氏は，理学・工学の学位を有する。幹事団に声を掛ける。
 - 緒方信一氏は，インフラとの関連でコラム執筆に適任である。
 - 対話形式を想定した場合，理学では意見の幅が大きく，もう少し候補者を広く見繕っても良い。
- (5) 作業の進め方
- 出版社との接触は，書籍の具体的な方針や内容を詰めた後にする。
 - 理学分野について，大塚副委員長が日本応用地質学会のグループと相談する。
 - 工学分野について，谷幹事長が****氏（****）と相談する。
 - 出版社について情報収集する。
 - 候補は，科学系の新書類の出版社（講談社等）や大学出版会とする。

- 各学会における著作権に係るルールを調査する。

4. その他

(1) 今後の予定

- 第3回の幹事会は、9月8日(月)15-17時に、JGS会館の3階小会議室で開催する。
- 3学会の連携・協働の意義を明示するための企画を検討する。

(2) 情報提供

- 土木学会(原子力土木委員会の断層変位小委員会)が断層変位問題に関するシンポジウム(2015年7月)を検討している。

以上(文責: 谷 和夫)